話 題

IRPA13 における AOARP 活動

荻 野 晴 之^{*1}

1. は じ め に

第 13 回国際放射線防護学会 (IRPA13) が 2012 年 5 月 13 日 ~ 18 日にかけて、英国スコットランド最大の都市グラスゴーで開催された。会場となった Scottish Exhibition and Conference Centre (SECC) はグラスゴー・セントラル駅から電車で約 3 分の便利な場所にあった。大会初日の開会式は、SECC のメインホール (Clyde Auditorium) がほぼ満員に埋まり、青と緑の深みのある照明に加えて音響の演出も加わり、独特の雰囲気醸し出していた。今回が初めての IRPA 参加となった筆者にとっては大変印象的な幕開けとなった。

今回の IRPA13 の全体の参加者は 1,784 名と発表された。内訳は、1,495 名 (166 名の当日登録を含む) の学術参加者、92 名の同行者、197 名の展示ブース参加者である。メインホール以外にも中規模の会議室が 6 部屋用意され、同時並行で様々なセッションが進行した。IRPA13 の大きな特徴は、会議全体を通じて「電子化」が進んでいたことにある。全論文 (フルペーパーとポスター) は、大会ホームページからダウンロード可能となっており、会期中、スマートフォンの専用アプリをインストールした端末と会場の無線 LAN を用いて電子資料を読んでいる参加者も多く見受けられた。また、各セッションでは会場からの質問を Twitter と電子メールで募る形式も採用された。

筆者は、Plenary Session “Engaging with Society” における基調講演、Key Issues Discussion Session (KIDS) “Stakeholder Engagement” におけるパネリスト参加、ポスター発表 3 件 (除染スクリーニング基準、汚染食品基準、暮らしの放射線 Q&A) に加え、アジア・オセアニア地区放射線防護協議会 (AOARP) の事務局長として、4 つの関

連する行事 (Associate Society Forum, AOARP Executive Committee Meeting, IRPA General Assembly, AOARP Regional Meeting) に参加した。

本稿では、IRPA13 における AOARP 活動について報告する。

2. AOARP について

AOARP とは、The Asian and Oceanic Association for Radiation Protection の略であり、2000 年 9 月に IRPA 理事会によって設置が承認された IRPA の地域協議会である。活動の目的は、①放射線防護に係る新しい情報の交換、②加盟学会の活動の強化、③会議、ワークショップ等の情報の周知、④放射線防護に関連する組織の結成の支援、⑤放射線防護改善のための学会間協力の強化、⑥協議会加盟学会の IRPA への加盟促進、である¹⁾。

現 AOARP 会長は小佐古教授 (東京大)、事務局長は筆者が務めている。構成員は、多い順に、日本 (804 名)、韓国 (402 名)、オーストラリア (221 名)、中国 (200 名)、マレーシア (125 名)、フィリピン (54 名)、インド (不明) の 7 か国である。AOARP では 4 年に 1 度、地域会議である Asian and Oceanic Congress for Radiation Protection (AOCRP) を開催している^{2,3)}。これまでの開催実績を第 1 表に示す。2010 年 5 月に東京で開催された AOCRP-3 は、日本保健物理学会の研究発表会に代わって開催された⁴⁾。

これまで AOCRP を開催した経験のある日本、中国、韓国では、2008 年 11 月より、日中韓三か国連携プログラムを結び、東アジアの連携体制を構築してきた⁵⁻⁷⁾。2012 年 6 月に開催された第 45 回研究発表会においても、日中韓三か国連携プログラムによる学会特別シンポジウムが開催され、「福島事故後のアジア地域の放射線防護のこれから」について議論されたところである。これまでの AOCRP は日中韓で開催されてきたが、2014 年には AOCRP-4 がマレーシアで開催されることから、東アジアの連携体制をアジア・オセアニア地区に拡大することが望まれていた。そこで、IRPA13 中に開催された

第 1 表 AOCRP-4 開催実績と予定

会合名	日付	国 (都市)
AOCRP-1	2002 年 10 月 20-24 日	韓国 (ソウル)
AOCRP-2	2006 年 10 月 9-13 日	中国 (北京)
AOCRP-3	2010 年 5 月 24-28 日	日本 (東京)
AOCRP-4	2014 年 5 月 12-16 日	マレーシア (クアラルンプール)

Haruyuki OGINO; AOARP Activities in IRPA13.

^{*1} 一般財団法人電力中央研究所原子力技術研究所放射線安全研究センター; 東京都狛江市岩戸北 2-11-1 (〒201-8511) Radiation Safety Research Center, Nuclear Technology Research Laboratory, Central Research Institute of Electric Power Industry; 2-11-1 Iwado-kita, Komae-shi, Tokyo 201-8511, Japan. E-mail: haruyuki@criepi.denken.or.jp

AOARP 理事会で日本から AOARP 連携プログラムを提案し、大枠の了解を得ることができた。

以下に、AOARP 連携プログラムを含め、IRPA13 における AOARP 活動について報告する。

3. IRPA13 における AOARP 活動

3.1 Associate Society Forum

IRPA13 開幕の前日、5 月 13 日の午前 10 時から午後 6 時にかけて、Associate Society Forum が Alsh Room で開催され、約 100 名が参加した。

冒頭、IRPA 会長である K. KASE 氏（米国）と副会長である R. CZARWINSKI 氏（ドイツ）が挨拶を行い、IRPA に加盟する個々の組織や個人こそが主人公であり、IRPA メンバーであるという意識を持つことの重要性を強調した。第 2 表は、Associate Society Forum の場で発表された、IRPA 加盟国・地域と IRPA 総会参加者数（＝票数）の最新情報（2012 年 5 月現在）であり、48 の学会と 17,900 名の会員から IRPA が構成されていることが分かる。このうち、AOARP に加盟する 7 学会の会員数を計算すると 1,806 名となり、IRPA 全体の約 10% に相当する。しかし、インドについては会費未納の問題もあって IRPA 側でも十分に把握できていないようであり、この集計にも含まれていない。

同フォーラムでは、Associate Society を対象に 2011 年に実施されたアンケート結果も紹介された。IRPA 加盟学会の全体像を把握することができる貴重なデータであるため、第 3 表にその概要を示す。過半数を超える IRPA 加盟学会が他国の学会と合同会議を行っていることが分かる。また、11 か国がこれから放射線防護学会を新しく設置することを考えており、アジア地域からはタイとインドネシアが挙げられている。

午後には、アルゼンチン、カナダ、クロアチア、フランス、韓国、オランダ、ノルディック、スロバキア、英国の順に、各学会が約 10 分ずつ、Associate Society としての活動報告を行った。

その後、新しい IRPA 理事候補者 10 名による演説が行われ、A. M. BOMBEN 氏（アルゼンチン）、B. CASSELS 氏（オーストラリア）、R. C. EL MOUSLI 氏（モロッコ）、A. HEFNER 氏（オーストリア）、小佐古敏荘教授（日本）、S. MAGNUSSON 氏（アイスランド）、R. MCBURNEY 氏（米国）、E. M. GIRONZINI 氏（ペルー）、C. OSIMANI 氏（イタリア）、R. VETTER 氏（米国）が登壇した。

Associate Society Forum の最後には、今後開催される IRPA 地域会合の概要が紹介された。具体的には、第 9

第 2 表 IRPA に加盟する国・地域（2012 年 5 月現在）

No.	国・地域名	会員数	総会参加者数
1	米国	4,895	27
2	英国	2,191	14
3	ドイツ - スイス	1,441	10
4	フランス	1,438	10
5	イタリア	1,070	8
6	日本	804	7
7	オランダ	601	6
8	スペイン	585	6
9	韓国	402	5
10	ベルギー	381	5
11	ロシア	379	5
12	ノルディック	357	5
13	アルゼンチン	353	5
14	カナダ	281	4
15	中国	200	4
16	オーストリア	255	4
17	オーストラリア	221	4
18	南アフリカ	209	4
19	クロアチア	170	4
20	マレーシア	125	3
21	ハンガリー	120	3
22	ルーマニア	112	3
23	イスラエル	105	3
24	ブラジル	100	3
25	イラン	100	3
26	メキシコ	100	3
27	キューバ	91	3
28	ギリシャ	72	3
29	チェコ	68	3
30	ベネズエラ	68	3
31	スロベニア	67	3
32	ポルトガル	60	3
33	フィリピン	54	3
34	ペルー	50	3
35	セルビアモンテネグロ	50	3
36	リトアニア	45	2
37	東アフリカ	40	2
38	コロンビア	30	2
39	アイルランド	30	2
40	モロッコ	30	2
41	キプロス	26	2
42	ブルガリア	22	2
43	ウルグアイ	22	2
44	エジプト	20	2
45	マダガスカル	20	2
46	ポーランド	20	2
47	スロバキア	20	2
48	インド	N.A	N.A
	合計	17,900	209

回南アメリカ地域会合（2013 年 4 月 15–19 日、ブラジル）、第 4 回アジア・オセアニア地域会合（AOCRP-4）（2014 年 5 月 12–16 日、マレーシア）、第 4 回ヨーロッパ地域会合（2014 年 9 月 13–17 日、モロッコ）、第 10 回南アメリカ地域会合（2015 年 4 月 13–18 日、アルゼ

第3表 IRPA 加盟学会を対象に 2011 年に実施されたアンケート結果

項目	結果
アンケート回収率	70% (34/48)
得られた回答の IRPA 会員に占める割合	98% (17,550/17,900)
男女比 (男性：女性)	70%：30%
所属組織	研究機関：30%, 医療：20%, 原子力：12%, 規制機関：14%, 産業：12%, その他：12%
ジャーナルを発行している	59% (20/34)
ニュースレターを発行している	53% (18/34)
ホームページを設置している	94% (32/34)
倫理規程を定めている	82% (28/34)
専門家育成コースがある	79% (27/34)
専門家認定を行っている	29% (10/34)
他国の学会と合同会議を行っている	56% (19/34)
地域協議会のメンバーである	70% (24/34)
他の学会とパートナーシップを結んでいる	35% (12/34)
学会をこれから設置したい	11 か国 (ベラルーシ, エクアドル, エルサルバドル, インドネシア, コソボ, クエート, モルドバ, パナマ, スーダン, タイ, チュニジア)

ンチン) の 4 件である。AOCRP-4 では、AOARP の理事メンバーでもあるマレーシア放射線防護学会 (MARPA) の Noriah Bt. MOD ALI 氏が登壇し、準備状況を報告した (第 1 図)。

3.2 AOARP 理事会

IRPA13 初日、5 月 14 日の午後 1 時から午後 2 時にかけて、AOARP 第 5 回理事会を Etive Room にて開催した。参加者は、日本からは、小佐古敏荘教授 (AOARP 会長, JHPS 会長), 酒井一夫氏 (理事, JHPS 国際対応委員長), 服部隆利氏 (JHPS 副会長), 筆者 (AOARP 事務局長), 韓国からは、J. K. Kim 氏 (理事, 前 AOARP 会長), K. W. Cho 氏 (理事, KARP 副会長), 中国からは H. Yang 氏 (L. SENLIN 理事の代理), オーストラリアからは C. Jeffries 氏 (R. RUBENDRA 理事の代理), マレーシアからは、N. Bt. MOD ALI 氏 (理事, MARPA 事務局), フィリピンからは E. M. VALDEZCO 氏 (理事, PARP 会長) の計 10 名であっ

た (第 2 図)。

小佐古会長による開会挨拶の後、最初の議題として、N. Bt. MOD ALI 氏が AOCRP-4 の準備状況を報告した。開催日は 2014 年 5 月 12-16 日、会場はマレーシアのクアラルンプールにある Putra World Trade Centre (PWTC), リフレッシャーコースや IRPA 特別セッションを設けること、詳細は今後 AOARP 加盟国の代表者によって設置するプログラム委員会で決定することが紹介された。

二つ目の議題として、小佐古会長と服部副会長が、AOARP 連携プログラム案を提案した。AOARP 連携プログラム案とは、AOCRP-4 がマレーシアで開催されることに鑑みて、従来の日中韓三か国連携プログラム⁵⁻⁷⁾をアジア・オセアニア地区にその適用範囲を拡大・発展させるものである。この連携プログラムが機能すれば、各国で開催される学会の研究発表会や関連シンポジウム等で、あるテーマに基づく特別セッションが設けられ、

第 1 図 Associate Society Forum で AOCRP-4 について発表する NORIAH Bt. MOD ALI 氏 (マレーシア放射線防護学会)

第 2 図 第 5 回 AOARP 理事会の様子

AOARP 加盟学会の代表者が相互に参加し交流を行うことが可能となる。今回の AOARP 理事会では、AOARP 連携プログラムの大枠についての合意を形成することができた。しかし、時間の都合で運用の詳細な条件については意見がまとまらなかったため、今後、各国からの代表者数の制限や参加費用の負担方法等を検討する必要がある。

三つ目の議題として、小佐古会長と服部副会長が、AOARP 若手賞の新規設置案を提案した。学会発表経験の少ない若手や学生であっても積極的に機会を与え、優秀な発表に学会賞を授与するという取り組みは、日本保健物理学会の若手研究会や学友会ではすでに実施されている。この取り組みが世界的にも認知されたのが IRPA 会長の K. KASE 氏も参加された AOCRP-3 であった。今回の IRPA13 でも若手表彰の取り組みが始まった。今回提案した AOARP 若手賞の新規設置は、日本国内の良好事例を AOCRP に展開するものである。この提案についても AOARP 理事会で大枠の合意を形成することができた。今後、IRPA が導入した採点システムを参考に、表彰プロセスを確立する必要があるため、引き続き事務局として必要な調整を行っていく。

四つ目の議題として、筆者が AOARP 事務局長として会計報告を行い、承認された。五つ目の議題として、オーストラリア、中国、日本、韓国、マレーシア、フィリピンの順に、各学会の活動報告を行った。今後、AOARP のホームページ上 (<http://www.jhps.or.jp/archives/category/nation/aoarp>) に活動カレンダーを設け、各学会の最新の情報を共有することを考えている。最後に、オーストラリアが AOCRP-5 (2018 年) の開催候補国に立候補する可能性を示した。

3.3 IRPA13 General Assembly

5 月 16 日の午後 2 時から午後 6 時にかけて、IRPA13 の General Assembly (総会) が Lomond Room にて開催された。第 2 表に示すとおり、日本は 7 名の参加が認められているため、日本保健物理学会第 2 回理事会 (2011 年 12 月 17 日) で参加が承認された、小佐古会長 (東大)、服部副会長 (電中研)、酒井氏、赤羽氏 (放医研)、杉山氏 (電中研)、谷氏 (東大)、筆者の 7 名が参加した。

本総会では、IRPA 定款変更、2008–2012 期の活動報告、2012–2016 期の予算、IRPA14 (2016 年) 開催国、IRPA15 (2020 年) の開催国、次期 IRPA 理事選挙などが議題となった。

まず、IRPA 定款変更については、IRPA の Executive

Officer を 12 年間務められた J. LOCHARD 氏 (フランス) が、現在の定款は 40 年前に作られたまま変わっておらず、近年の電子的なコミュニケーションの発達を十分に反映していない中で、Affiliate members というメンバーシップを新たに設け、学会の設置が困難な発展途上国からも新規のメンバーを取り入れてはどうか提案した。しかし、同提案では、Affiliate members の権利や義務などは IRPA Rules Committee と IRPA 理事会で今後決定するとされ、詳細が含まれていなかったことや、企業が法人の Affiliate members として加わる恐れが指摘されたことから、本総会では却下された。次に、2008–2012 年の活動報告と 2012–2016 年の予算案の説明が R. TOOHEY 氏 (米国) によって行われ、すべて承認された。

2008 年にアルゼンチンで開催された IRPA12⁸⁾ では、2016 年の IRPA14 の開催国候補として南アフリカが選挙によって選出されていたが、今回の IRPA13 の総会で正式に開催国として承認された。次回の IRPA14 が開催される 2016 年は、南アフリカ放射線防護学会にとって 20 周年であり、IRPA にとっても 50 周年の記念行事となることが紹介された。

続いて、次期 IRPA 理事選挙が行われた。新 IRPA 会長には R. CZARWINSKI 氏 (ドイツ)、副会長には R. COATES 氏 (英国)、Executive Officer には B. LE GUEN 氏 (フランス)、Treasurer (会計) には R. TOOHEY 氏 (米国)、Publications Director (編集委員長) には C. CLEMENT 氏 (カナダ) がそれぞれ選出された。

そして、本総会で最も注目を集めた新しい IRPA 理事の選挙が行われた。今回の選挙では、4 名の当選枠 (3 名は任期 8 年、1 名は任期 4 年) に対して、A. M. BOMBEN 氏 (アルゼンチン)、B. CASSELS 氏 (オーストラリア)、R. C. EL MOURSALI 氏 (モロッコ)、A. HEFNER 氏 (オーストリア)、小佐古敏荘教授 (日本)、S. MAGNUSSON 氏 (アイスランド)、R. MCBURNEY 氏 (米国)、E. M. GIRONZINI 氏 (ペルー)、C. OSIMANI 氏 (イタリア)、R. VETTER 氏 (米国) の 10 名が立候補するという激戦となった。最初の投票では参加者 1 人あたり最大 4 人の候補者に投票することができた。当選するためには、会場参加者の 169 人に加え、現職 (当時) の理事 11 人を併せた参加者 180 人の過半数である 90 人以上の支持を得る必要があった。第 1 ラウンドの投票の結果、A. M. BOMBEN 氏 (アルゼンチン)、A. HEFNER 氏 (オーストリア)、S. MAGNUSSON 氏 (アイスランド) の 3 名がその過半数の支持を得て当選した。

残り 7 名は過半数以下であったため、残り 1 枠をかけて第 2 ラウンドに移った。この第 2 ラウンドでは参加者

1人あたり1人の候補者に投票することができた。第2ラウンドの投票の結果、過半数を獲得した候補者はおらず、投票数の少なかった下位2名が落選し、B. CASSELS氏（オーストラリア）、小佐古敏荘教授（日本）、E. M. GIRONZINI氏（ペルー）、C. OSIMANI氏（イタリア）、R. VETTER氏（米国）の5名が第3ラウンドに進んだ。第3ラウンドでも同じく参加者1人あたり1人の候補者に投票することができ、投票の結果、R. VETTER氏（米国）が97票を得て最後の1枠を勝ち取った。

第2表にある会員数と総会参加者数の関係を見て分かるように、現在の制度では一票の大きな格差が存在している。選挙に当選するためには、米国や英国のような大国の支持はもちろんのことではあるが、2-3票の投票権を有する国・地域の支持をいかに得るかがIRPA理事選挙の鍵を握っていると言える。

IRPA総会の後半には、もう一つの注目イベントであったIRPA15（2020年）の開催候補国を決定するための選挙が行われた。立候補したのは、韓国（ソウル）、オーストラリア（アデレード）、ブラジル（リオデジャネイロ）の3か国であり、投票の結果、韓国（ソウル）に決定した（第3図）。次点はオーストラリア（アデレード）であり、韓国で開催できない場合のバックアップとなった。IRPAのアジアでの開催は、IRPA10が日本（広島）で2000年に開催されて以来、20年ぶりとなる。

今後、2020年のIRPA15韓国開催に向けて、AOARP加盟学会がAOARP連携プログラムをうまく活用し、世界の中でも原子力・放射線分野での急成長が見込まれるアジアの連携がより一層強固なものとなることが望まれる。

3.4 AOARP Regional Meeting

5月17日の午後2時半から4時にかけて、AOARP地

第3図 General AssemblyでIRPA15を誘致するJ. K. KIM氏（韓国放射線防護学会）

域会合をCarron Roomにて開催した。本会合では、日本保健物理学会が2012年4月17日に発表した「福島第一発電所事故に関する放射線防護上の課題～日本保健物理学会の対応と提言～」⁹⁾について服部副会長が全体を説明し、AOARP加盟国である韓国やフィリピンの参加者からの個別の質問に日本からの参加者で答える形式で行われた。

会場からは、日本全体の汚染状況はどうなっているのか、住民の心理的な影響をフォローしているのか、といった質問が寄せられた。汚染状況については、文部科学省が実施している航空機モニタリングの測定結果を紹介し、理解を得た。韓国の参加者からは、ソウルでも放射性セシウムが検出され、マスクを含めて大きな騒動になったことが紹介された。

また、心理的な影響については、福島県の県民健康管理調査におけるフォローと日本保健物理学会暮らしの放射線Q&A活動委員会の質問者に寄り添った回答方法を紹介した。韓国の参加者からは、福島県の専門家だけではなく、日本全国の専門家が関与できるような体制が構築されているのか質問があり、筆者の方から、広島大学や長崎大学の専門家も加わった委員会が「こころの健康度や生活習慣に関する調査」などを含めた県民健康管理調査の進め方を決めていることを説明した。

IRPA13全体を通じて言えることだが、「日本保健物理学会の対応と提言」に関する英語版の報告書¹⁰⁾が学会ホームページ上で公開されていたことから、参加者から寄せられる様々な質問に答える際にも、同報告書を紹介することで、円滑に答えることができた。質問者もオンラインで同報告書を読むことができたため、より深い議論へと導くことができた。このように情報化社会のツールをうまく活用しながらタイムリーに情報発信することは極めて効果的であり、今後の効果的な国際対応を考えていく上での良好事例であると考えられる。

4. おわりに

福島事故の教訓、緊急時対応、リスクコミュニケーション、原子力人材育成など、日本の経験を世界と共有していく必要がある中で、アジア・オセアニア地区から新しいIRPA理事を選出することができなかったことは残念である。しかし、AOARP連携プログラムの大枠について合意を形成することができたことは一つの大きな成果となった。新しいIRPA理事の顔ぶれからも分かるように、従来のUNSCEAR-ICRP-IAEAという関係にIRPAを加えた新たな構造が今後の放射線防護に係る

国際的なフレームワークとなっていく気運が高まっている。AOARP 連携プログラムを各国の学会が活用し、アジア・オセアニアの連携をより強固なものとする事で、IRPA を通じて国際社会に効果的に意見を発信できる仕組みを構築していく必要がある。筆者の所属する若手研究会では、2012 年 11 月に東京で開催される OECD/NEA CRPPH 第 6 回アジア会合において、前回の第 5 回会合¹¹⁾に続き、日本放射線影響学会の若手研究者と連携して若手セッションを開催する予定である。2014 年の AOCRP-4 (マレーシア)、2020 年の IRPA15 (韓国)に向けて、インドネシア、タイ、ベトナムなどの新規導入国における次の世代を担う若手との連携も視野に入れながら、AOARP 活動にこれからも取り組んでいきたい。

参 考 文 献

- 1) 加藤正平；アジア・オセアニア放射線防護協議会 (AOARP) の設立について、保健物理, **36** (2), 159-160 (2001).
- 2) 飯本武志, 高橋知之；第 1 回アジア・オセアニア放射線防護会議 (AOCRP-1) に参加して、保健物理, **37** (4), 275-277 (2002).
- 3) Hao Hu; Participating AOCRP-2 in Beijing, China, *Jpn. J. Health Phys.*, **42** (2), 174-175 (2007).
- 4) T. KOSAKO and T. IMOTO; Report of the Third Asian and Oceanic Congress on Radiation Protection (AOCRP-3), *Jpn. J. Health Phys.*, **45** (3), 203-216 (2010).
- 5) 服部隆利；アジアの放射線防護関連学会との連携の必要性と IRPA12 における本学会の活動状況について, **43** (4), 307-313 (2008).
- 6) 服部隆利；韓国放射線防護学会主催の RP Culture に係るワークショップと秋季研究発表会への参加報告, 保健物理, **46** (1), 7-11 (2011).

- 7) 服部隆利；米国保健物理学会研究発表会および RP Culture に係るワークショップへの参加報告, 保健物理, **46** (2), 115-123 (2011).
- 8) 高原省五, 津田啓介；第 12 回国際放射線防護学会国際会議 (IRPA12) に参加して, 保健物理, **44** (1), 9-12 (2009).
- 9) 日本保健物理学会理事会；福島第一原子力発電所事故に関する放射線防護上の課題～日本保健物理学会の対応と提言～, 保健物理, **47** (2), 83-92 (2012).
- 10) Japan Health Physics Society; Issues Associated with Radiation Protection after Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Disaster —Responses of and Recommendations from Japan Health Physics Society—, Available at: <http://www.jhps.or.jp/jhp/wp-content/uploads/2012/04/53224f1dbbc1063ffff46bb5cc3fa01c.pdf>, Accessed 26 June 2012.
- 11) 山外功太郎, 今岡達彦, Le Ngoc Thiem, 松本義久；第 5 回 OECD/NEA アジア会合若手セッション「放射線防護に責任を有する若手専門家の確保と育成」を開催して, 放射線科学, **52** (10) 21-25 (2009). Available at: <http://www.nirs.go.jp/publication/rs-sci/pdf/200910.pdf>, Accessed 26 June 2012.

荻野 晴之 (おぎの はるゆき)

1982 年広島市生まれ。2006 年に (財) 電力中央研究所に入所。専門は放射線防護。日本保健物理学会では、若手研究会幹事, 暮らしの放射線 Q&A 活動委員会副委員長, 放射線防護標準化委員会表面汚染作業会幹事, アジア・オセアニア地区放射線防護協議会 (AOARP) 事務局長 (Secretary General) を務めている。
Email: haruyuki@criepi.denken.or.jp